室町時代～大正時代の『論語』の二字漢語の受容史

—『論語』学而篇第一を中心に—

劉禹辰（北京師範大学外国語言文学学院日文系博士後期課程）

木村秀次（2008:277）が「『論語』は、……我が国に公式にもたらされた最初の漢籍であるとされる。そこに見られる漢字・漢語もまたその思想とともに言語面で広く深く浸透し、日本語の基盤を形成していったと考えられる。」と指摘した如き、『論語』における漢語は日本語に深い影響を与えたのである。

本研究は、室町時代～大正時代の『論語』の訓点資料と抄物（訓点附）を研究資料に、『論語』学而篇第一の二字漢語（異なり語数 20、延べ語数 27）を研究対象に、訓点に影響した要素、二字漢語が音読みされた原因、二字漢語の受容のレベル差などの研究角度から考察を行い、以下の研究結論を得た。

一、集解本であっても集注の注、集注本であっても集解の注が存在する。
二、加点に影響した要素は、中国側注釈書、漢字の本来の訓（もっとも普通な意味）、加点時代、訓点資料自身の特徴などが挙げられる。
三、『論語』学而篇第一において、音読みで翻訳（理解）される語が一番多い。
四、二字漢語を音読みにした要因として、「君子」のような文化負載語は和語で翻訳できない場合と、「遠方」のように音読みでも理解しやすい場合がある。
五、「君子」と「遠方」は、二字漢語の日本語における受容のレベル差をも反映する。
六、『論語』の二字漢語は、『論語』資料に限らず、日本の文学にも受容された。

連体詞「ある」と「とある」に関する一考察

——字違いの類義語に着目して—

顧滌非（東京外国語大学大学院総合国際学研究科博士前期課程）

本発表では現代日本語における連体詞「ある」と「とある」について分析する。

連体詞「ある」は定性、不定性や意味用法などの面から分析がされているのに対して、「とある」に焦点を当てた研究は見当たらない。しかし、テレビのテロップを確認すると、「ある」でよさそうなところに「とある」が用いられることがしばしば見受けられる。そこで、本発表では『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のデータを用いて、「ある」と「とある」の使用実態と意味用法を分析し、両者の違いを明らかにする。抽出したデータを考察した結果、「ある」に比べ、「とある」は「*とある程度」「*とある意味」と共起せず、これは引用の「と」に起因するものと考えられる。また、「とある」の特徴的な用法として自称詞の用法が挙げられる。さらに、「とある」をレジスターの pmw で確認すると、「ブログ」「韻文」「知恵袋」の値が高かった。

断り場面におけるヘッジの使用に関する一考察

―日本語学習者の母語転移の視点から―

李泓林（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

コミュニケーションの中で依頼を断ることは、人間関係を損なう危険性が高い発話行為であり、「断り」を緩和する手段としてヘッジの使用が重要である。しかし、ヘッジは様々な言語形式で示されるだけでなく、機能も文脈によって異なり、さらに文化的側面が大きく影響するため、適切な使用は第二言語日本語学習者にとって容易ではないことが指摘されている（堀田・堀江 2020:55）。このような背景から、本研究では、日本語学習者の断り場面におけるヘッジの使用に着目し、その使用困難の要因を母語転移の視点から考察することを目的とする。研究課題: ①学習者が使用するヘッジには、母語の影響で語用論的転移が見られるのか。②学習環境や学習歴がヘッジの使用にどのような影響を与えるのか。研究デザインとして、日本語母語話者、中国語母語話者、中国人日本語学習者を対象に、「多言語母語の日本語学習者横断コーパス（I-JAS）」のロールプレイ 2（断り場面）を用いて、語彙・語句的ヘッジの使用実態を分析した。

留学生のキャリア形成を目指す日本語の授業実践

―対話的問題提起学習による教室活動を中心に―

周亜芸（東邦音楽大学留学生センター講師）

本発表では、多言語多文化背景を持つ学部留学生向けの日本語授業で、3 人の学部卒の先輩の就職及び進路選択に関する内容のテキストをめぐって、対話的問題提起学習よる対話活動を３回行い、その対話活動の進め方と授業後の学習者の評価を報告した。対話の流れは、まず、授業前にテキストを読んでから、内容理解を促進するためのワークシートを各自で完成する。その後、授業時に各自のワークシートを持ち寄せて共有した上で、グループによる対話活動を行う。最後に、グループによる対話活動が終わった後に、最初にワークシートに書いた内容を踏まえて、グループワーク後の考えや感想を書く。授業後の学習者の期末レポートや授業 1 年後の半構造化インタビューから、この対話活動は、①留学生のキャリア形成を考える契機、②日本社会および日本の就職事情への理解促進、③多様な価値観および生き方のあり方への認識、という３点の成果があることが分かった。

ソ系指示詞と感動詞の関連性について
—「その一」と「それ！」を中心に—

西村卓也（埼玉大学人文社会科学研究科博士前期課程）

ソ系指示詞と感動詞「その（一)」、「それ（！)」(以下「その一」、「それ！」）との関連性を分析する。そして、「その一」、「それ！」は、指示詞としての性質（「指示性」、「承前性」、「承後性」）を擬似的に持っており、現場性を獲得しながら拡張をしている形式であることを主張する。二つの感動詞の拡張プロセスを考察していくと、この二つの感動詞はソ系指示詞の「人称区分型」、「距離区分型」の性質を持っていることがわかる。具体的には「その一」は「聞き手指示」と、「それ！」は「中距離指示」と基盤を共有していると考えられる。さらに、その拡張段階において指示詞における「未分化のソ」（金井 2017）と同じように、「人称区分型」でもなく、また「距離区分型」でもない構図が現れ出ることを明らかにした。このことは、指示詞との関連性においての一里塚となりうることを示唆している。

日本語教育が盛んな大連で日本語を教えてみて

近藤芙由（大連外国語大学講師）

私は 2023 年 3 月に埼玉大学大学院人文社会科学研究科博士前期課程を修了し、同年 9 月より日本語教育が盛んな中国遼寧省大連市に位置する「大連外国語大学」で日本語教師として勤務をしている。本学は、その前身となる「大連日本語専科学校」の創立から、2024 年で 60 周年を迎える歴史ある大学であると同時に、日本語教育における長い伝統と数多くの実績を誇る大学として広く知られている。中国国内最大規模の日本語学院を有するこの大学には、多様なバックグラウンドを持つ日本人教師が 11 名在籍し、会話や作文、スピーチとディベートといった日本語の授業をはじめ、その他スピーチ大会の練習と指導、日本語コーナーなど幅広い業務に従事している。日本語学習意欲が高い学生たち、外国人教師への深い理解と配慮がある中国人教師と学内の職員等に支えられた環境での日本語教師としての日々の業務と生活の様子などについて簡単に紹介した。

魔都上海で日本語を教えて

後藤隆幸（上海財経大学講師）

上海は「魔都」と呼ばれているが、本稿は日本語教員としての立場からなぜ「魔都」と呼ばれるのかについて事例とともに述べたものである。私が勤める上海財経大学について紹介したのち、授業、学生指導、テスト作成といった業務について簡単に説明した。その後、上海における日本語教育の問題点を主に学生、環境、教員という 3 つの観点から見ていき、特に学生については学年、学習歴、AI という観点から問題を考察した。そしてこの解決のために学生に日本語への興味を持ち続けてもらうことが必要だとし、現在行っていることや、今後行っていくべきことについて述べた。また、さらに日本人として苦労する部分についても、IT という視点及び言語の観点から紹介した。総じて、上海は高い利便性がある一方で物価の高騰や意外な不便さがあり、日本語を学ぶ環境としては、競争社会を背景にした学生のやる気に対して、充分に日本語が役立てられない環境がある現状について指摘した。